漢字神話と漢字学習

―非漢字系学習者における漢字先入観について―

シュテファン　カイザー

要　旨

非漢字系の学習者に対する日本語教育のなかで漢字が特に問題になることは周知の事実であるが、その理由についてはあまり解明されていない。本稿は英語圏などでは漢字について科学的な根拠のない先入観や「漢字神話」が存在し学習の妨げになるという仮説のもとでその先入観や漢字神話がいかなるものであるか英語圏や日本で出版されている文献の検討によって明らかにしようとするものである。さらに文字体系としての漢字の位置付けを検討し、英語圏でも日本でも漢字は表意文字や表語文字として表音文字というアルファベットと対立的に扱われ、表音性に乏しいかのような印象を与える傾向のあることを明らかにする。しかし、漢字とアルファベットなどは相違点よりも共通点が多く、違いはむしろ程度にすぎないと論じ、より能率のよい漢字学習の膳立てを作る。

〔キーワード〕　漢字学習　非漢字系学習者　漢字神話　文字体系

Kanji Myths and Kanji Learning : on kanji prejudice among learners from non-kanji countries

Kaiser, Stefan

It is a well known fact that kanji are a big problem in the Japanese language education of learners from areas where kanji are not used, but the reasons for this have hitherto not been made clear. Working with the hypothesis that in English speaking areas, among others, there exist preconceived ideas and myths about kanji which hamper the acquisition of kanji, this article attempts to establish the nature of such preconceived ideas and myths by examining how kanji are viewed in publications on the subject in English and Japanese. The treatment of kanji as a system of writing (or part thereof) is also problematic in that kanji are seen as fundamentally different from alphabetic scripts when in fact it is possible to argue that kanji have more similarities that differences to alphabetic and other scripts, a position that enables a far more positive attitude towards kanji learning.

1．はじめに

外国人が日本語を学ぶときの大きな壁の一つに漢字学習の問題がある。この問題はいわゆる非漢字系の学習者に特に深刻であることは現場の教師にはよく分かると思うが、その理由については常識的なところ以外はまだ十分な分析が施されていない部分が多い。

たとえば、日本語コースのカリキュラムの中で占めるべき漢字の時間の割合も実証的な研究や教育理念によって目安をたてるよりも教室で教えるのに時間がかかり不能率だということでもっぱら学習者の自習に任せる傾向が強い。学習ストラテジーに関しても学習者の到達目標・文化的背景・認知スタイルなどによって個人差があるはずなのに、学習ストラジーも一般的に学習者任せとなっている。

本稿はその中から主として文化的背景に関連する問題をとりあげる。英語圏などでは漢字について科学的根拠がないままに一般に行なわれている漢字に対する先入観や漢字神話ともいうべきものがあり、しかもそれが学問の世界でも幅をきかしており、漢字に対する正確な知識の普及の邪魔をする。それが漢字の正確な理解を妨げる結果を生み、学習者の意欲を削ぐという仮説をたてる。その仮説をテストにかける前の段階としてその先入観や神話がどんなものであるかを主として英語圏や日本で出されている漢字などについての出版物で明らかにしたい。

2．漢字についての先入観および神話

2．1　英語圏、あるいは日本の文献で見る漢字に対する先入観・マイナスイメージ

漢字についての「古典的な」発言はSansom（1928）で以下の形で見える。

> （1）理解されるために他のシステムの支援を要するような文字体系を説明するための形容辞の選択には迷ってしまう。ある人にとってはおもしろい研究対象になることには間違いないが、実用に耐える道具としてはこれに劣るシスエムは先ずないだろう[1)]。

これは厳密には特に明治・大正時代でよく使われた総ルビ付漢字かなまじり文について言っているが、Miller（1977）は日本語についての神話をいくつか訂正しながらも漢字仮名まじり文について次のように批評する。

> （2）・・・日本で使われている文字体系は厄介で費用がかかる・・・今の世の中のために造られていないのにいまだに使われている[2)]。

Miller（1982）ではさらに極端な言い方をしている。

（3）日本語の文字体系のなかでの漢字の相変わらずの使用は正書法上の愚の骨頂というべく、近代工業化社会では他に例を見ない、ばかげた行為である[3)]。

そしてその説の傍証としてかなり大げさな表現で日本のタイプライターの取り扱いにくさを取り上げる。

（4）・・・日本人のタイピスト、（人類学という）三つの漢字を見つけ、それらを拾い上げ・印刷し・機械のなかへ戻す装置を動かすまでにもうどうでもいいと思うほど疲れきっていなければの話だが、・・・[4)]

1980年代初頭のころにはワープロも普及しはじめたはずだが、Miller はかまわず次のようにいい続けるのである[5)]。

（5）日本語をタイプするプロセスはあまりにも遅々としており費用がかかるから、特別な場合（主として公的法的文書の作成）以外には一般には使われない。それ以外の文章、例えば鈴木［孝夫］の数多くの著者の原稿などは全部手書きでなければならない・・・[6)]

Unger（1987）はその点をもっと発展させたものである。日本語のコンピュータ入力はアルファベットを使う言語と比べて時間がかかるから二倍ぐらいの費用が必要であるとし、日本の経済にかかる負担がたいへん大きいという。そしてその問題は漢字の入力を止めない限りなくならないから、遅れ早かれ日本の文字体系を仮名かローマ字に変えたほうがよいという趣旨のことをいう。

日本でもやはり漢字を特別扱いをする例を見かける（3節参照）。漢字の教科書でさえも必要以上にマイナスのイメージを押し出す場合もある。たとえば、Kanji Text Research Group, University of Tokyo（1993）では次のようにいっている。

（6）このエキゾチックでエーリアンな文字はあなたの周りのありとあらゆるところに存在する・・・[7)]

「エキゾチック」には「異国風」などの意味があり、「エーリアン」は「異質な」、「不調和な」などの意味になるが、少なくとも後者はネガティブなイメージが強いといえる。

2．2　漢字についての神話

漢字についての神話はかなり以前からもいろいろ行われている。「漢字神話」とは、ここでは科

学的な根拠がないのにあちこちの文献などであたかも事実であるかのように繰り返される漢字についての特性づけや発言などをさすものとする[8)]。

DeFrancis（1984）は中国語における漢字神話をいくつか取り上げるが、なかでもいわゆるイデオグラフ神話と普遍性神話がよく知られている。イデオグラフ神話というのは漢字は現在行われているあらゆる文字体系と違って音を解さずに意味を直接に伝えるものであるという趣旨のものであり、普遍性神話は漢字文化圏の中で漢字が一種のリンガ・フランカであり、漢字文化圏の人間は漢字を通して自由にコミュニケーションできるというものである。無論、いずれも DeFrancis によって否定されるわけだが、イデオグラフ神話はだいぶ昔から一部では攻撃されている[9)]にもかかわらず、いまだに生き残っているといわざるをえない（3節参照）。その理由の一つとして考えられるのは最近まではイデオグラフ説の当否を実証的にテストにかける研究がなかったことである。ところが Horodeck（1987）の研究によると日本語の漢字の書き誤りには圧倒的に同音字によるものが多く、ほかのあらゆる文字体系と同様に日本の漢字も意味を直接に表わすものではないことが確認された。中国語の漢字についても同様の研究結果が出ている（Hayes 1988）。

イデオグラフ神話はそうとう古くから行なわれている[10)]漢字神話であるが、比較的最近見かけるようになったものもある。その一つは日本人に読書不振児がアルファベット圏と比べて少ないというものである。Coulmas（1989）ではその神話を繰り返してから、次のような神話へとさらに発展させる。

（7）意義素ベース文字体系と音ベースのシステムの違いは単なる符号化に関する表面的な違いではなく、文字言語の単位の貯蔵および処理における神経心理学上の違いによるものであることは明らかである[11)]。

日本に読書不振児が少ないということは今まで決定的なデータもなく何となく言われ続けてきたものであったが、Stevenson 他（1986）の研究によって立証的に否定された。Stevenson 等の大がかりな調査で日本の生徒をサンプルにとった結果としては、日本人生徒が音節対応の比較的きれいな平仮名習得により初めは優勢であったが、五年生になるとその優位がすでに失われており、サンプルの日本人生徒の8％（アメリカ人生徒では3％）は「学級水準よりも少なくとも3年遅れたレベルで読んでいたが、それは読書不振のを計るのによく使われる尺度である」[12)]。

漢字の話になると、一見専門的な文献の場合でも驚くような意見が出ていたりする。たとえば、Skelton and Metzger-Court（1988）は応用現語学の立場に立っているが、イデオグラフ神話を繰り返すばかりでなく、漢字には生成能力がない[13)]という新しい神話を作り出している。漢字に生成能力があることは数千字程度で何万語の中国語や日本語が書き表せることを考えただけでも分かるわけだが、歴史的に見ても音符の役割がまさしく生成的であったといえる[14)]。前掲書ではさらに以上2点の神話を教授法にまで当てはめ、意味（部首）・比喩・語源説による記憶法が漢字教育に

有効であるとする。Gelb（1975）の考えでいうと、漢字のみならずすべての文字体系の発達を可能にした表音式化を完全に無視してしまっているわけである。表音の原理をなくしてはまさしく生成不能のシステムになってしまい、一語ごとに別の文字が必要になるという、発達した文字体系とは無関係の世界になってしまう。つまり表意文字というのはGelbのいう文字の先駆段階でしかありえないものであり、Skelton and Meltzger-Court（1988）の以上のような説では他の文字体系との類似点よりも相違点を著しく強調していることになる。

3．文字体系にかかわる問題

世界の文字体系の分類における漢字の扱い方にも問題があり、漢字と漢字以外の文字が根本的に違うという印象を与えてしまう。それは英語圏でも日本でも同様の意見が主流であるから不思議な話である。

日本では文字を表音文字と表意文字とに二大分するのが一般的であり、文字体系の系統が著しく違う趣旨になる。たとえば日本語教育学会編（1982）では次のような言い方をしている。

（8）すべての文字は表音文字と表意文字に大別される・・・(:471)

あるいは国語学会編（1980）でも漢字は特別である印象をもたせる情報が乗っており、たとえば次のようである。

（9）・・・古い中国に発生し、現在なお使用されている表語文字。(:188)
（10）漢字は形・音・義の三要素を有している。(.189)

ここで問題にしたいことは「表語文字」と「漢字に意味がある」という二点である。

「表語文字」という考え方は英語圏などの文献にもあり、たとえばSampson（1985）は世界の文字を次のように分類している。

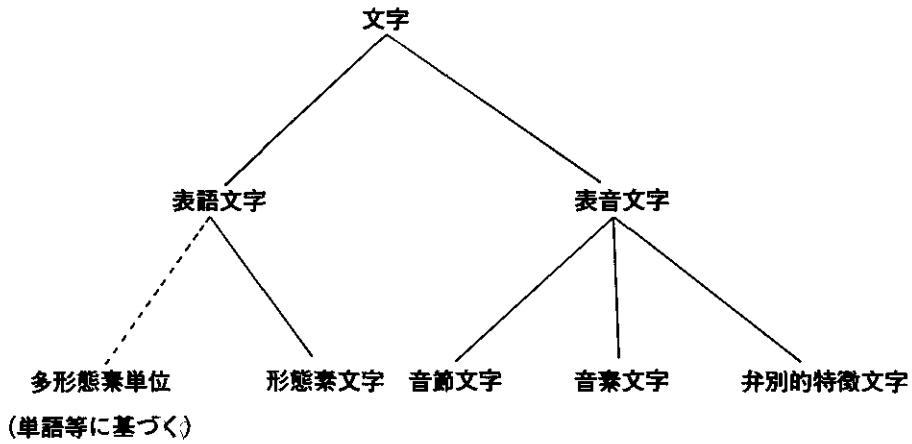

図1：Sampson(1985：58)による分類

図1の「表語文字」の下位分類にあたる「多形態素単位」へ伸びる線が実線ではなく点線になっているのは単語ベースの文字体系は実存しないという意味だが、表語文字で実存する形態素文字の方に中国語が入っている。日本語については少なくとも一時的には多形態素単位ベースの漢字使用が行なわれていたという考え方もある（亀井孝1957/85)が、現代語に関してはそれはむしろ例外的な現象というべきである[15]。

文字体系における表語・表音文字という二大別の分類は歴史が古く、Taylor（1899）のイデオグラム・フォノグラムの区別以来よく行われている。用語こそ違うが、イデオグラムでもロゴグラムでもモルフォグラムでもモルフォロゴグラムでもいわんとするところは同じことであり、つまりフォノグラムが音の単位を表わすものであるのに対して、意味の単位を表わすものであると考えられる。

しかし、既にBloomfield（1993）が言っているように[16]、文字は言語を記録するものだけであって、言語ではない。したがって、いかなる体系の文字でも言語音を表わす以外には考えられないはずであり、漢字もその例外ではない。漢字が一つの文字体系を成す前の段階として表語的な要素がどれだけあったかは別問題（発達上の問題）として、でき上がった体系としての漢字は主として表音文字である。Gelb（1963）がすでに指摘しているように、すべての文字体系が音表記の体系化という原理があってこそ文字体系として成立するものである。

漢字は音を表わす道具としては能率がそれほど高くなく、音読みに限っていえば当用漢字の場合には形声文字の表音度が58％弱であるが、ある程度一致するものをも含めると90％を超える数字になる（宮島他編1982　218)から、音を表わすことには違いはないのである。アルファベットにはそのような欠点がなく表音性が優れているという一般の意見なども神話というべきで、特に英語のスペルはけっして高能率のものではない。Zachrisson（1933）によると、英語の40数種の音に対して600種類以上の書き表し方が行われており、可能なスペルのすべての組み合わせで計算した場合に

は scissors という語に対して596,580種のスペルが可能だという驚くべき結果になる。したがって英語の場合にはアルファベットの表音度が非常に低く、漢字音の58％云々どころではないのである。もちろん、イタリア語やフィンランド語のようにずっと表音度がよい正書法も存在するわけではあるが、表音性を問題にした場合には少なくとも英語におけるアルファベットと比較した場合には漢字の方に軍配が上がることになる。にもかかわらず、以上見てきたように英語による著作の中で漢字がいかに非合理的であるかなどと攻撃されているのに、英語のスペルに関してはそのような発言がほとんどないのである。

発達した文字体系には純粋な体系は存在しないという立場（注17参照）から漢字はどんな文字であるかを考えた場合には基本的には表音文字である以外には答えが出ないはずなのに、多くの専門書では以上見てきたような表音文字と対立する二大分類が行われていることは、漢字は特別で異質なものだという神話を支えるものと思われる。そのような誤解を避けるためにはそれぞれの文字体系に存する違いは基本的なものではなく、程度の差にすぎないことを強調するようなアプローチがほしいところである。

そのような立場に立つ研究は従来ほとんど見られなかったが、DeFrancis（1989）では下記のような分類（図２）を行なっている。漢字という文字の位置付け、あるいはその教育・学習を考えた場合には斬新さがあり、たいへん有益に思われる。

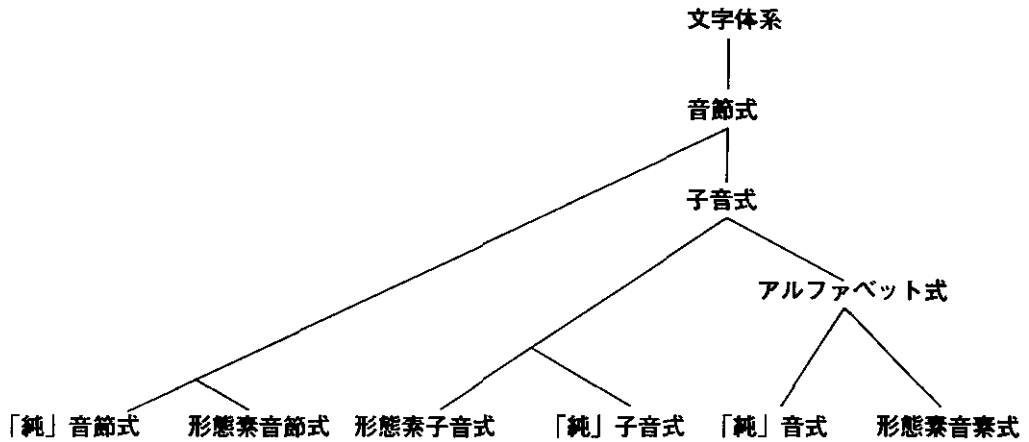

図 2 DeFrancis (1989 : 32) による分類

「純」（“pure”）[17]音節式には仮名などが入れられており、形態素音節式（morpho-syllabic）には中国語の漢字が入れられている。日本の漢字をどこに入れたらよいかについてははっきりした言及がないが、基本的には中国語の漢字に準じて考えることも可能であるかもしれず、もしそうであるとすれば非漢字系の漢字学習者のモティベーションを害すると思われる要素がだいぶ減ることに

なる。漢字は何かの歴史上の間違いで現代まで残ってしまっており、「論理的で高能率」のアルファベットと比べてたいへん劣っている文字であるという誤った知識を訂正し、正しい位置付けのもとで表音的な側面を最大に利用した漢字教育や学習ストラテジーを考案する必要がある。

4．今後の課題

中国語の場合に漢字一字の表わす音の単位はたしかに一音節であり、その意味では音節文字と呼んでよいものであろう。しかし、どこまでを音節文字と呼んでよいものかという、音節文字の定義や範囲についての研究もほとんどなく、これからの課題になる。それから、音節文字と同時に形態素単位であるかどうかについて詳細な検討も必要である。DeFrancis（1984：115）では単音節神話というレッテルのもとでこの問題を扱っているが、DeFrancis の推定では現代中国語の独立形態素は44％で、独立して使えないもの（半独立形態素、45％）よりも少し劣勢である。何を形態素と考えるかという、定義の仕方に関わる問題にもなってくるが、以上の２タイプの単音節以外には単音節としてはいっさい使われないものも11％ほどあるという（例えば葡萄や珊瑚など）。

日本語の場合には訓読みの漢字もあり、話しがさらに複雑になる。しかし音読字に限って考えた場合には、独立形態素の比率が中国語よりももっと少なくなるのが大きな問題になる[18]。形態素は一般には独立・非独立の組み合わせはあっても非独立同士の組み合わせは例外的存在と見るべきであろう。

そのような見地から見ると日本語の音読漢字ははたして形態素と呼べるかという疑問が残るが、今後の課題としたい。

注

1）“One hesitates for an epithet to describe a system of writing which is so complex that it needs the aid of another system to explain it. There is no doubt that it provides for some a fascinating field of study, but as a practical instrument it is surely without inferiors.”（Sanson 1928　44）

2）“... the writing system used in Japan, mixing Chinese characters with phonetic syllabary symbols, is cumbersome and costly. It is being perpetuated in a world for which it was not designed.”（Miller 1977：56）

3）“...（the）continued use of the Chinese script within the Japanese writing system remains the height of orthographic folly, a major foolishness not to be observed in any other modern industrialized society”（Miller 1982：191）

4）“... the Japanese typist-supposing she is not too exhausted even to care by the time she has located the three Chinese characters involved［in writing *jinruigaku*］and propelled the mechanism that picks them up, prints them, and redeposits them in her machine...”（ibid.: 191）

5）日本語の文字体系についての英語による正確な知識を伝える著書の欠如はミラーのこの分野で

の権威とも相まって他の学者をしてそのような歪められた情報を専門的な書物の中で繰り返させる結果（例えばSampson 1985 : 192）を生んだりすることは残念というべきことである。

6）"the process of typing Japanese is slow and so costly that it is used only under special circumstances, usually restricted to official or legal documents. All other texts, as for example the manuscripts of Suzuki's many books, must be entirely handwritten .. (ibid : 191)

7）"These exotic and alien characters are all around you...." (Kanji Text Research Group, University of Tokyo 1993 : English Introduction)

8）ここでいう「神話」は「科学」の反対概念のようなものであり、Cook（1980 : 1)の次のような定義に近い。

神話というのは・・・未知なるものを取り扱い、解明方法を示さずにその未知なるものを命名する手段を提供するものである。一方、科学は未知なるものに対しそれを解明する目的で名称を与える。("A myth provides a technique for handling the unknown, for naming the unknown without offering a solution. Science, on the other hand, proceeds to name an unknown in order to solve it")

9）例えばBoodberg（1940）など。

10）この神話の歴史的考察についてはUnger（1990）に詳しい。

11）"... it is clear that the differences between morpheme-based writing systems and sound-based writing systems are not just superficial differences in coding, but relate to neuropsychological differences concerning the storage and processing of written language units (Coulmas 1989 : 134-135)

12）"reading at least three years below their grade level, a common criterion for reading disability" (Stevenson 他1986 : 233)

13）"not generative"

14）漢字に本来生成能力があることは共通構造要素（音符）の字を羅列しても一瞥して分かる。

士仕志誌・・・

己忌記紀起・・・

工功巧江攻紅貢・・・

15）宮島他篇（1982 : 250)によると、常用漢字のうちで訓が1以内の字は全体の66.6%で、ちょうど3分の2になっており、それ以外にいろいろな型があるにせよ、平均すると訓の割合は0.98と1にはわずかながら及ばない。

16）"Writing is not language, but merely a way of recording language by way of visible marks" (Bloomfield 1933 : 21).

17）引用符はそもそも文字体系に純粋なものがないという意味である。Gelb（1963 : 199)の言葉で

言えば、

純粋なも字体系は存在しない。それはちょうど人類学では純血の人種がなく、言語学ではまじりけのない言語がないのと同じである。("There are no pure systems of writing just as there are no pure races in anthropology and no pure languages in linguistics")。

つまり、文字体系のレッテルは程度問題次元の問題であり、どの特徴がいちばん勝っているかということで特徴付けをしているわけである。宮島他篇(1982 : 242)によると、新聞の漢字調査結果としては音読み漢字の自立用法は2%ときわめて少ない。

18) 宮島他篇(1982 : 242)によると、新聞の漢字調査結果としては音読漢字の自立用法は2%と極端に少ない。

参考文献

1. Bloomfield L. (1933) *Language.* New York : Henry Holt and Company.
2. Boodberg P. A. (1940) "Ideography" or "iconolatry"? *T'oung Pao* 35 · 266-288.
3. Cook A. S. (1980) *Myth and language.* Bloomington : Indiana University Press.
4. Coulmas F (1989) *The writing systems of the world.* Oxford : Blackwell.
5. DeFrancis J. (1984) *The Chinese language : fact and fantasy.* Honolulu University of Hawaii Press.
6. ——— (1989) *Visible speech : the diverse oneness of writing systems.* Honolulu : University of Hawaii Press.
7. Gelb I. J. (1963) *A study of writing.* 2nd ed Chicago University of Chicago Press.
8. ——— (1975)「文字」『ブリタニカ国際大百科事典』第19巻.
9. Hayes E. B. (1988) "Encoding strategies used by native and non-native readers of Chinese Mandarin". *Modern Language Journal* 72/2 : 188-95.
10. Horodeck R. A. (1987) *The role of sound in reading and writing kanji.* Unpublished PhD thesis, Cornell University (University Microfilms International).
11. Kanji Text Research Group, University of Tokyo (1993) *250 Essential kanji for everyday use.* Tuttle Language Library.
12. Miller R. A. (1977) *The Japanese language in contemporary Japan.* (AEI-Hoover Policy Studies 22) Washington DC : American Enterprise Institute for Public Policy Research
13. ——— (1982) *Japan's modern myth : the language and beyond.* New York/Tokyo Weatherhill.
14. Sampson G. (1985) *Writing systems : a linguistic introduction.* Stanford University Press.
15. Sansom G. B. (1928) *An historical grammar of Japanese.* Oxford : Clarendon Press.
16. Skelton J. and Metzger-Court S. (1988) "From kana to kanji : problems in learning written Japanese". In Ager D. E. (ed) *Written skills in modern language degrees,* AMLC : 31-41.

17. Stevenson H. W. 他 (1986) "Learning to read Japanese". In Stevenson 他 (eds) *Child development and education in Japan*. New York : Freeman 217-235.

18. Taylor I. (1899) *The history of the alphabet*. New York : Scribner's.

19. Unger J. M. (1987) *The fifth generation fallacy : why Japan is betting its future on artificial intelligence*. New York/Oxford University Press.

20. ——— (1990) "The very idea the notion of ideogram in China and Japan". *Monumenta Nipponica* 45/4 : 391-411.

21. Zachrisson R. E. (1932) *Anglic : an international language, with a survey of English spelling reform*. 2nd enlarged edition. Uppsala and Stockholm : Almqvist & Wiksells Boktryckeri-A.-B.

22. 亀井孝 (1957/85)「古事記はよめるか－散文の部分における字訓およびいわゆる訓読の問題－」『亀井孝論文集』第4巻、吉川弘文館。

23. 河野六郎 (1953/70)「諧声文字論」河野六郎著作集第3巻（文字・雑纂）平凡社。

24. 国語学会編 (1980) 国語学大辞典。東京堂出版。

25. 日本語教育学会編 (1982)『日本語教育辞典』大修館書店。

26. 宮島達夫他篇 (1982)『図説日本語』(角川小辞典9) 角川書店。